

〔報告〕

看護学生の成人看護学におけるフィジカルアセスメント演習の

学びの実態（第1報）

村上 大介 松田 絵美 青木 玲子 伊藤 てる子 庄子 弘子 菅原 美知子¹⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

要旨

本研究では、看護学生がフィジカルアセスメント演習を通してどのような学びを獲得しているのかを明らかにすることを目的とした。A大学看護学科において、成人看護学で行うフィジカルアセスメント演習に参加する看護学科2年次学生88名を対象とし質問紙調査を実施した。88名中17名(19.1%)から回答が得られた。多くの学生が学びになった、役立つと回答しており、自由記述の結果からは呼吸音の聴診に対する記述が多くみられた。演習は技術、学習意欲の向上に効果があったと考えられる。一方で、学生の目的意識や準備状況にはばらつきが見られ、学びや難易度の捉え方に影響している可能性が示唆された。学生が看護技術の実際を具体的にイメージし学習意欲を高めることで、準備状況を改善し学びを深めることができる可能性が示唆された。

【キーワード】フィジカルアセスメント技術、演習、学び

I. はじめに

フィジカルアセスメント技術は、看護師が患者を看護する上で必要な情報を収集する手段として重要な位置を占める技術である。

「フィジカルアセスメント」に関しては、アメリカ合衆国において1970年代から看護職に必須の技術とみなされ、学部レベルでの教育が開始された¹⁾。わが国の学士課程におけるフィジカルアセスメント教育は、看護の大学化に伴って1990年代に開始されている。近年のフィジカルアセスメント技術教育は独立した科目として教授され、他の看護技術項目よりも演習時間を長くしている大学が多いと報告されている。また、2009年度に改正された保健師助産師看護師学校養成所指定規則指導要領には、フィジカルアセスメントを看護実践の基盤とし、その教育を強化するよう明記されている²⁾。

森田らは、フィジカルアセスメントについて次の

ように述べている。

フィジカルアセスメントは日常生活行動をからだの構造や仕組みとつなげて深く理解し、看護技術を適用する科学的な裏づけ、その効果を客観的に評価するためにも欠かせないものである³⁾。

本学では、フィジカルアセスメント技術として単独の科目ではなく、基礎看護学領域で講義・演習を行っている。成人看護学領域では、2年前期にフィジカルアセスメント演習を実施しており、1コマ90分で臨地実習の際に必要な胸部・腹部の聴診、触診、動脈触知、対光反射の確認を行っている。これらの技術は、3年後期から4年前期にかけて行う成人看護実習Ⅰ(急性期)、Ⅱ(慢性期)の中で実践する機会が多い。特に周手術期においては、手術後の患者の観察を行う上で呼吸音、腸蠕動音の聴診は欠かせないものである。しかし、臨地実習において演習で学んだフィジカルアセスメント技術が十分に活かされていない現状がある。

現在成人看護学領域の中で、フィジカルアセスメント技術の修得についてはフィジカルアセスメント演習、実習前演習、臨地実習という段階を踏んでいる。

フィジカルアセスメント演習ではフィジカルアセスメントの根拠や知識を学び、演習を通して実際のフィジカルアセスメント技術を修得することを目的としている。

実習前演習は、具体的にどのような場合にフィジカルアセスメント技術を活用するかを理解し、実習でのフィジカルアセスメント実践へつなげるものである。

臨地実習では、実習施設で実際に患者を受持ち、フィジカルアセスメント技術を実践しアセスメントを行い、看護過程の展開を通して看護を実践する。

次に実際に行っているフィジカルアセスメント演習の内容を図1. に示す。

これまでの演習では技術習得を目的とした演習の前後の課題（事前課題、事後課題）を実施し、評価を行ってきた。しかし、事後課題は感想に終始す

る学生もおり、フィジカルアセスメントの技術演習を通して学生がどのような学びを獲得できているか実態が明らかではない現状があった。

そこで今回は、学生が技術演習を通してどのような学びを獲得しているのかを明らかにし、演習をより効果的にするためにアンケート調査を実施したため報告する。

II. 研究目的

実習に出る前の対象学生がフィジカルアセスメント技術の演習を通してどのような学びを獲得しているのかを明らかにする。

III. 研究方法

1. **研究対象** : A 大学看護学科において、成人看護学で実施するフィジカルアセスメント演習に参加する看護学科2年次学生 88 名（平成 28 年度）
2. **データ収集期間** : 平成 28 年 6 月 30 日～7 月 8 日
3. **データ収集方法** :
 - 1) 成人看護学のフィジカルアセスメント演習終

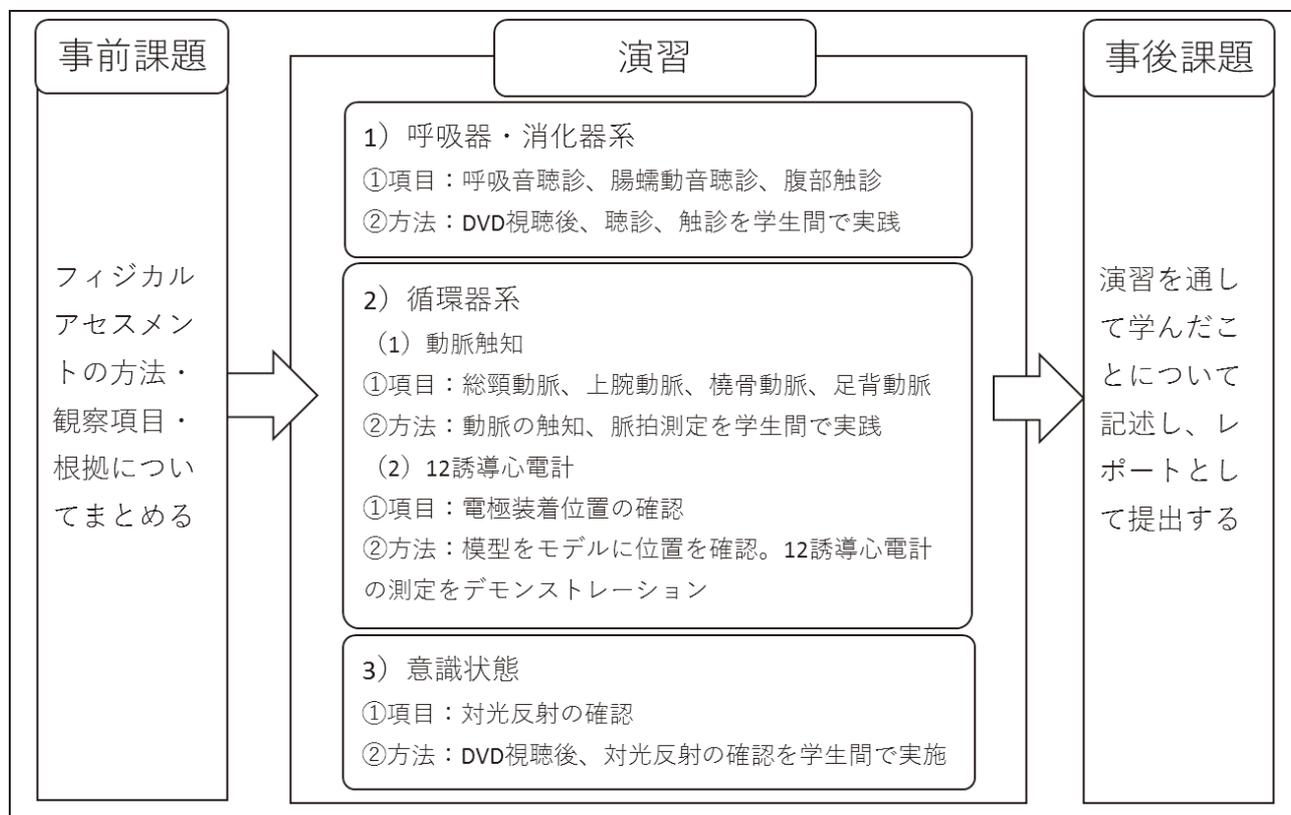


図1. フィジカルアセスメント演習内容

了後に、本研究について説明をする。本研究の主旨について説明し、本研究が成績に影響しないこと、提出は任意であること、提出しないことにより不利益は生じないことを説明する。

2) 説明用紙、無記名自記式質問紙(自由記述式)を配布し、質問事項を記入の上、指定のレポートボックスへ提出してもらうよう伝える。

3) 質問事項:

- (1) 演習の環境について: ①演習時間の長短とその理由、②教員数の多少とその理由
- (2) 演習の内容について: ①全体の難易度、難しかった演習項目とその理由、②全体の学び、学びになった演習項目とその理由、その他に学びになったこと、学びにならなかった理由、③役に立つか、役に立つ理由、役に立たない理由

(3) 意見、要望

4. データ分析方法: 回収率を算出し、各質問項目について単純集計を行う。

5. 倫理的配慮

本研究は、東北文化学園大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施している(承認番号; 文大倫 16—01 号)。また本研究が成績評価に影響しないことを文書・口頭で説明し、不参加による不利益は生じないことを文書・口頭で説明した。個人情報保護に配慮し、無記名の質問紙とし、電子データは通し番号で管理し、ネットワーク通信をしないコンピューターに保存した。回収した質問紙は鍵のかかる部屋(教員研究室)で管理した。

IV. 結果

1. 回収率

対象者 88 名中 17 名から回答が得られた。(19.1%)

2. 演習環境について

1) 演習時間・教員数

演習時間については、余裕がある 10 名 (58.8%)、もう少し時間がほしい 7 名 (41.2%) であった。教員数については、余裕がある 11 名 (64.7%)、もう少し人数がほしい 9 名 (35.3%) であった。(図 2)

2) 時間が足りないと思う理由 (自由記述)

時間が足りないと思う理由として以下の通り回答が得られた。

『人数が多いと実施できない生徒がいると思ったから。体験できる生徒との差がある。/最後まで深くふれることができなかったから。/時間が足りなくて、みんな平等に演習することが出来ていない。/少ないと思ったから。いそがしい。終わる時間がギリギリ。/もう少しゆっくり聴診の練習がしたかった。/もう少しゆっくりやってほしい』

3. 演習内容について

1) 難易度

やや難しい 11 名 (64.7%)、やや簡単 6 名 (35.3%)、難しかった演習項目は、呼吸音の聴診 3 名 (30.0%)、腸蠕動音の聴診 5 名 (50.0%)、腹部の触診 2 名 (20.0%) であった。(図 2、3)

2) 難しかった理由 (自由記述)

難しかった理由として以下の通り回答が得られた。

『聴診器をあてる場所が覚えていなかったため、音を聴けるまでに時間がかかったから。/音をはっきり聞こえなかった。/聞きとるところができなかったりした。/聴こえなかった。/聞くまでに時間がかかった。/血流の音が聞こえる。あと、周りの音がうるさいのでなかなかききとれなかった。先生があまりきてくれなくて、ポイントなど教えてもらえなかった。/なかなか聞きとれなかった。/どのくらいの強さで触診すれば良いか、触診できたとしても正常異常の判断が難しかった。/部位がよくわからなかった』

4. 学びについて

1) 学び

とても学びになった 8 名 (47.1%)、まあまあ学びになった 8 名 (47.1%)、あまり学びにならなかった 1 名 (5.8%) であった。学びになった演習項目については、呼吸音の聴診 9 名 (64.3%)、腸蠕動音の聴診 2 名 (14.3%)、腹部の触診 1 名 (7.1%)、動脈の触知 2 名 (14.3%) であった。(図 2、3)

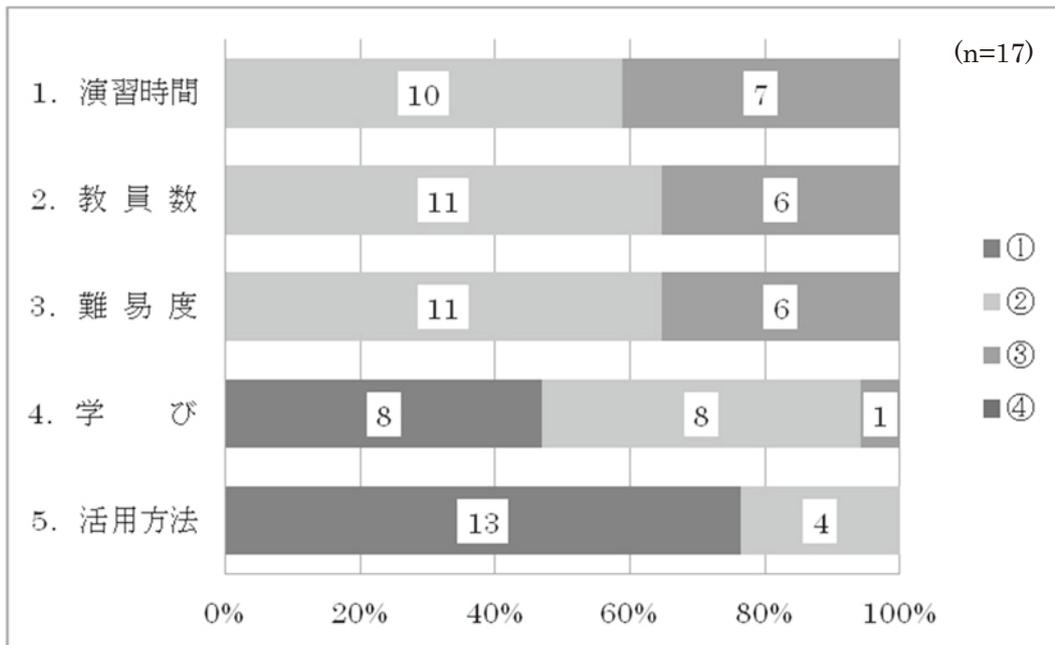


図2. 質問項目（4 択）の単純集計結果

質問項目に対する回答番号の対応

- ・演習時間：①長すぎる、②余裕がある、③もう少し時間がほしい、④全く足りない
- ・教員数：①多すぎる、②余裕がある、③もう少し人数がほしい、④全く足りない
- ・難易度：①難しすぎる、②やや難しい、③やや簡単、④簡単すぎる
- ・学び：①とても学びになった、②まあまあ学びになった、③あまり学びにならなかった、④全く学びにならなかった
- ・活用方法：①とても役に立つ、②まあまあ役に立つ、③あまり役に立たない、④全く役に立たない

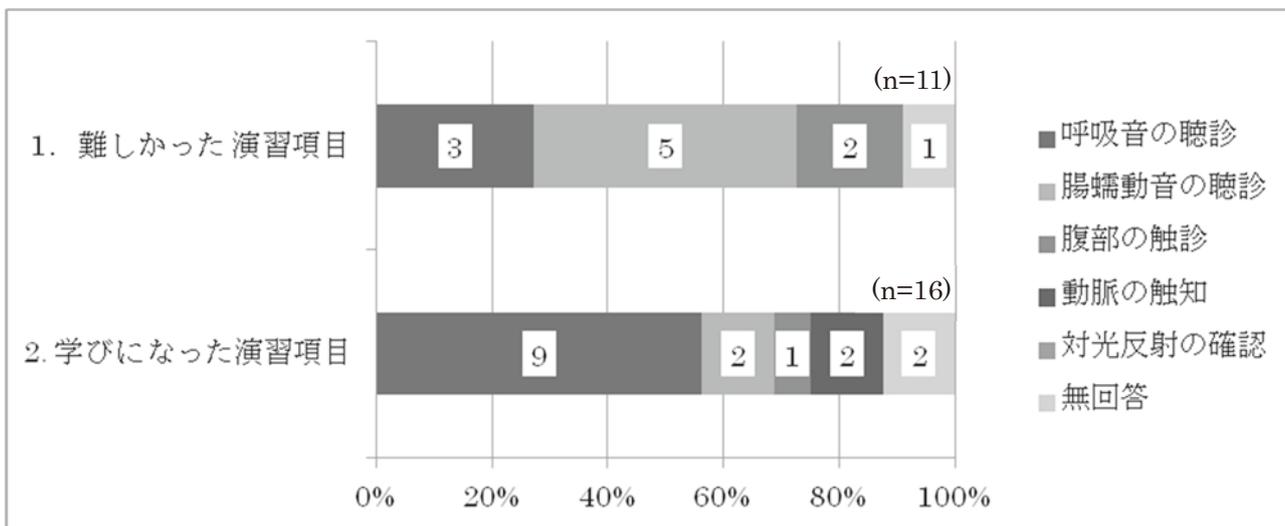


図3. 演習項目に関する回答結果

2) 学びになった理由（自由記述）

学びになった理由として以下の回答が得られた。

『1年生の演習の時は、時間がなくてできなかったため、今回、初めて行うことができたから。／分かりやすかったから。／ギシギシという想像するのは難しい音を聴くことができたから。／肺だけでなく、気管や気管支の音も区別して聴診できた。／場

所によって呼吸音がちがったから。／よく聴こえたし、気管の分岐点の場所であったり肺の大きさなど具体的に把握出来た。／呼吸音がどんな音なのか知ることができた。動脈の位置を知ることにより今後役に立つと思った。／呼吸理学療法の復習になり、その前の時間の授業でわからなかったことがわかったから。／部位によって聞こえ方が異なるのが

ちゃんと分かったから。／動脈の名前や位置、触知場所を復習できる良い機会だった。／聴診する部位によって聴こえる音がちがったり、聴こえ方が異なっていたから。／脈拍の触知を行った時、自分の脈拍の回数が少なく遅いことがわかった。遅い理由として運動するためだと気づけた。自分の身体と向き合い、知りながら勉強になったのでよかった』

3) そのほかの学び (自由記述)

1) の他に学びになったこととして以下の回答が得られた。

『呼吸音は聞きとりにくい部位と聞きとりやすい部位があった。／動脈をさがすときに位置を確認しながらできたし、動脈の触知のしかたなどがわかった』

4) 学びにならなかった理由

学びにならなかった理由として『以前にも行った内容であったから』という回答が得られた。

5. 学んだ技術の活用方法について

1) 役に立つか

とても役に立つ 13 名 (76.5%)、まあまあ役に立つ 4 名 (23.5%) であった。(図 2)

2) 役に立つ理由

役に立つ理由としては以下通りの回答が得られた。

『1 年生の時に 1 回おこなったこともあったが、忘れていたこともあったので復習になったから。／実習先で実践しやすいと思ったから。／正常な音を知っておけば異常な音に気づくことができるから。／患者さんのアセスメントをするときに今までよりも正確に、できるようになった。／働いたときに、フィジカルアセスメントは色々な場面でも役立つし、基本的な知識だと思うから。／実際に演習をして行うので身につく。／役に立つと思ったから。／呼吸音や触診の練習、動脈の位置を知ることにより、今後役に立つと思った。／基本的な技術だから。／実習に行ったときにかにやってほしいと言われたときに半信半疑ではなく正確にできるようになるから。／実際に自分で部位を見極めて聞く必要があるから。／自分が看護師という立場になった時に

実践できるのはもちろんだが、活用方法を覚えておくことで、普段何かあった時にも役立つ。／フィジカルアセスメントは、看護師なった上でとても大切な技術であることと、自分の経験や感覚でしか身につけることができないから。／バイタルサインなどでも脈を測ったり、診察するうえで役に立つことを復習もできるから』

V. 考察

1. 演習環境について

フィジカルアセスメント演習の実施上の工夫として、1 名の教員当たりの学生担当数が多くならないよう学生を半々に分け、一方はフィジカルアセスメント演習を行い、残る半数の学生は症状マネジメントについてのグループワークを行っている。これを、学生を入れ替え 2 週にわたって行うという工夫をしている。実際に技術を練習する時間は、1 コマ 90 分のうち 45 分程度である。今年度は、1 名の教員当たりの学生数を 6~12 名とした。1 名の教員当たりの学生数の幅が大きいのは、男子学生を男性教員が担当し、他の女子学生を 4 名の教員で分担したためである。

1) 演習時間について

回答としては余裕があると答えた学生の方がやや多い結果となった。

もう少し時間がほしいと答えた学生の自由記述からは、個々の学生に対して十分な演習時間が確保出来ていない可能性が示唆された。

成人看護では病態と関連付けて技術の実践へつなげる特徴があり、技術そのものは既習のものが多し。しかし学生のごく一部は、聴診器の扱い方を十分理解しておらず演習がスムーズに進まない要因ともなっていた。そのため他の学生への対応が十分できなくなる可能性が考えられ、それらが不公平感や、演習の困難感や難易度に影響している可能性がある。

2. 演習内容について

1) 演習の難易度について

(1) 難易度が高いと感じる要因

回答した学生の過半数はやや難しいを選択しているが、やや簡単を選択した学生もあり、演習時間の結果と似通った結果となった。

自由記述では、聴診の際に「音が聞き取りにくい」という意見が複数あった。このことが困難感の要因となっていると考えられる。

聴診が困難である要因の一つは、学生自身が聴取すべき音を認識できない可能性があることである。

学生には DVD で呼吸音や腸蠕動音を聴いてももらった後に演習を行うが、聴取した経験がないため聴取している音を認識することが難しい可能性がある。学生自身が実際の聴取で初めて認識できたという記述もあり、呼吸音や腸蠕動音を認識することも学びと言える。

もう一つは周囲の雑音によるものである。自分の演習が終了した学生の私語など、周囲の雑音によって、聴診が難しい場面も見られた。これによって学生は、演習時静寂を保つことの重要性について学ぶ機会となったと考える。

(2) 学生が感じる「難しい」演習項目

腸蠕動音の聴診と回答する学生が最も多く、次いで呼吸音の聴取、腹部の触診の順となった。呼吸音は個人差がそれほど大きくなく連続して聴取可能だが、腸蠕動音は断続的な音であり、その時の体調にも左右されるため個人差が大きい。そのため、難易度が高いと感じた可能性がある。

2) 学びについて

ほとんどの学生は、とても学びになった、まあまあ学びになったと回答しており、演習が学びにつながっていることが分かった。

その中でも、過半数の学生が呼吸音の聴診が学びになったと回答している。直近の演習で理学療法学専攻の教員と連携した呼吸理学療法の演習を行っているが、自由記述の中にも呼吸理学療法の演習の復習になったという記述が見られたことから、強い影響があると考えられる。

学びの内容として、聴取出来たということのみに着目している学生がいる一方、解剖学的な知識と併せて理解している学生もあり、学生によって学びの

深さに差が見られた。

また、自分の身体と向き合い興味を持って学びを得ている学生もあり、演習によって知識・技術と患者理解の実際に結びついていることが考えられた。

このほか、動脈触知に関する記述が見られた。日常生活の中では意識しなければ触知する機会の少ない総頸動脈や足背動脈の触知について、興味を持って演習に取り組んでいる様子が伺えた。

一方で、教員がなかなか回ってこないという記述から、求めるときに教員の指導が得られず学んでいる技術を修得できているか不安を感じている可能性が考えられた。

3) 学んだ技術の活用方法について

(1) 演習技術の活用に対する認識の違い

すべての学生が役に立ったと回答している。自由記述から、一部の学生は学んだ技術を就職後にどう活用できるか考えながら学習していることが分かった。そのほか、実習を想定した活用方法の記述も見られ、技術の実践を意識づける機会となっていると考えられる。

3. 目的意識と学びの関連性

1) 目的意識と学び

成人期にある人間の学習の特徴として、学習者が学習ニーズを自分自身でつかみ、それにこたえる形で教育がなされたときにもっとも効果的となると言われている⁴⁾。

就職後を意識した記述をしている学生は看護師として働く具体的なイメージを持っており、目的意識が明確になっている。そのような学生は全員がとても学びになったと回答しており、難易度もやや簡単と捉える傾向が見られた。

このことから目的意識が難易度のとらえ方や学びに影響している可能性が示唆された。

2) 学習意欲向上への寄与

坂下らは実践の場で活用できる技術とするためには、反復トレーニングを行い、知識と技術の統合が必要であること、学生自身が看護技術習得そのものの意義とその将来像を認識し、自らの現在の技術習得の限界を知り技術が不十分である

際の影響も認識することで、技術習得の原動力となる可能性を述べている⁵⁾。

フィジカルアセスメント演習を実施する 2 年前期は実習の経験がないため、学んでいる技術が看護実践の場でどのように活用されるかを具体的にイメージすることが困難である可能性がある。この演習を通して実践のイメージが具体化され、学習意欲を高められた学生もおり、技術の実践に意識を向ける良い機会となった可能性が示唆された。

4. フィジカルアセスメント演習の今後の課題

1) 学習意欲を高める必要性

フィジカルアセスメント演習の目的や内容、事前課題については、演習前の講義時間に説明の時間を設け十分な説明を行っているが、学生の準備状況には開きがある。

演習で学ぶ看護技術が臨床でどのように活用されるか理解できるよう工夫し、フィジカルアセスメント技術の活用場面を具体的にイメージする支援が必要であると考えられる。

それによって学習意欲を高め、それぞれの学生が事前学習を充実させることができれば、より多くの学生が演習による学びを深められる可能性がある。

VI. 結論

フィジカルアセスメント演習は学生のフィジカルアセスメント技術の向上および学習意欲の向上に効果があったと考えられる。中でも呼吸音の聴診

に関する学びが多くみられた。

一方で、学生の準備状況や目的意識にはばらつきが見られ、難易度の捉え方に影響している可能性が示唆された。

学生が看護技術の実際を具体的にイメージし、学習意欲を高めることで、準備状況を改善し学びを深めることができる可能性が示唆された。

VII. 研究の限界

今回の研究では、回収率が 19.1%と低く、偏りがみられる可能性がある。また、データ数が少なく統計的な分析が出来なかった。今後はデータを増やして偏りを減らし、統計的な分析を活用してより信頼性の高い結果を導くことが課題である。

VIII. 参考文献

- 1) 横山美樹, 佐居由美: 看護師のフィジカルアセスメント技術の臨床現場での実施状況—フィジカルアセスメント開講前後の卒業生の比較からみたフィジカルアセスメント教育の検討—。聖路加看護大学紀要 2007;33
- 2) 佐藤富美子: 看護大学教員・看護師を対象としたフィジカルアセスメント教育の効果。東北大学保健学科紀要 2012;21(1):25-32.
- 3) 森田孝子: 系統別フィジカルアセスメント看護ケアの質の向上をめざして。東京, 医学評論社, 2006
- 4) 小松浩子: 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 成人看護学 1。東京, 医学書院, 2014
- 5) 坂下貴子: 看護学生の看護技術習得に対する認識～気管内吸引技術の習得過程をとおして～。城西国際大学紀要 2012;21(1):40-56.

The nature of Learning of nursing students through the “Physical assessment technique exercise” in adult nursing (first report)

Daisuke Murakami, Emi Matsuda, Reiko Aoki, Teruko Ito,

Hiroko Shoji, Michiko Sugawara¹⁾

1) Department of Nursing, Faculty of Medical Science and Welfare, Tohoku Bunka Gakuen University

Abstract

In this study, we aimed to clarify the nature of Learning of nursing students through the “Physical assessment technique exercise”. We conducted a questionnaire survey on 88 Grade 2 nursing students participating in the exercises. Responses were received from 17 out of the 88 subjects (19.1%). Many students responded that the exercises helped them to learn effectively. It is thought that the exercise was effective in improving technique and learning motivation. But the purpose consciousness of the students was various. Students with clear sense of purpose tended to feel a low degree of difficulty. Further, the students answered that learned so much. Therefore, it was suggested that students' sense of purpose may have influence on difficulty and learning. It was suggested that there is a possibility students could improve the preparation situation and deepen their learning by concretely imagining the actual nursing skills and raising motivation for learning.

【Key words】 Physical assessment technique, Exercise, Learning